

## 近代化と時間意識

— 大正期における勤勉の論理の形成 —

大川 清 文

## 一 はじめに

日本の近代化、とくに資本主義の過程を顧みたと、多くの研究者が抱く疑問がある。「なぜ日本の人々は、エリート層に限らず、一般の労働者まで、こんなに勤勉に働くのだろうか？」ここでいう勤勉は、多くの場合「時間」を無駄にしてはならない、という意味を含んでいる。そこでこの小論では、何が日本の労働者をそれほどまでに勤勉にさせるのか、という問題を、「時間」という切り口によって探っていくことにする。ただし、ここで取り上げる「時間」とは、時間の社会的なあり方、とくに時間に関する社会意識、時間意識である。

## 二 分析視角

小論に関連するこれまでの研究のなかで最も重要なものとして、真木悠介「時間の比較社会学」(一九八一年)が挙げられる。この研究は、時間の社会学論的考察を踏まえながら、原始共同体から近代社会までの時間意識の類型を析出している点で見ると多い。ただし、こと「日本における」時間意識の変遷というテーマについては、古代日本について詳細に検討されているほか、「日本近代の近代としての周辺性」が指摘されるとともに、

その若干の具体例が挙げられるにとどまっている。

「近代化」を世界史レベルで考察するという目的ならば、これで満足できるかもしれないが、「日本の」近代化を研究する立場にたつとすれば、真木による研究には再考の余地があるのではないだろうか。

さて、社会学は基本的に現代社会を研究対象とするが、その現代社会は、常に「時間の厚み」を有している。その「時間の厚み」は、対象によって長い場合もあるし、短い場合もある。したがって、現代社会、第二次世界大戦後の社会、という等式が常に成り立つわけではない。

それでは、「労働」の領域を「時間」という切り口から取り上げた場合、日本ではいつからが現代と呼べるのであろうか。そのひとつの解答は、大正期であると考えられる。

大正期には、一日平均労働時間の短縮、および一人あたり一日平均自由時間の増加が見られ、活動写真の隆盛などのように、余暇生活に対する関心も高まった。これらの点は、一九九〇年代の今日の日本の課題とも重なる部分も多い。

## 三 「人格」承認の要求

一九二〇年前後は、時代の大きな節目にあたり、一人あたり、一日平均自由時間が四時間台に乗ると同時に、労働者の消費水準が大幅に上昇した。そして、実質賃金(↓カネ)上昇、生活水準向上、と自由時間(↓ヒマ)増加とは、さらに労働者による「上品さ(レスペクタビリティ)」の追求につながった。その具体的な動きとしては、当時(とくに一九一〇年代)の労働運動において、労働者が資本家に彼らの「人格」を承認させることを大きな

目標にしたことが挙げられる。

明治期以来、労働者(当時は「職工」と呼ばれることが多かった)は道徳性が乏しいとされ、社会的地位が低かった。一般社会は、労働者を「品性の最も劣等なる人間外の別者の如く」考えている、と友愛会会長鈴木文治は指摘した。そこで、労働者も道徳的には一人前の人間であること(↓「人格」)を認めさせることが、一つの争点となり、一九二〇年前後に、その主張はある程度認められるようになった。

#### 四 近代的な「勤勉」の論理

この「人格」承認の置かれた文脈に注意する必要がある。当時の労使関係は、厳格な上下関係(ハイアラーキー)を前提とするものであった。企業には、学歴(小学卒、中学卒、高卒以上)に応じた三つの基本的身分集団があり、これらの集団は、賃金体系や、休日、食堂、工場へ入退する門などが異なっていた。

したがって、資本家による労働者の「人格」承認は、労働者の「権利」としてよりむしろ、資本家が労働者に与えた「恩恵」という形で受け止められた。友愛会の機関紙で「労働者から資本家へ」の要望として、「職工の人格を認められたきこと」と「親心を持たれたきこと」とが並列されているが、これには、労働者は自分の「人格」が認められれば(例えば、自由時間が認められる、呼び捨てにされないなど)、その「恩恵」に感謝して会社のために貢献するようになる、という論理が働いているのが見てとれる。この論理には、労働者が「勤勉」になる、あるいは「勤勉」にならざるを得ないようなしくみが、作動しているのである。

「勤勉」という徳目自体は、江戸時代後半以降「通俗道徳」

(安丸良夫)という形で存在していたが、大正期に「人格」承認を介しての「勤勉」という新たな(↓近代的な)形態が多少なりとも現れたことは、注目に値する。

ハイアラーキーを前提とした社会においては、資本家による「人格」の承認がいつそうの勤勉さを引き出す、という一種逆説的な論理関係が、日本の「近代化」過程に見られること、そこにこそ、(冒頭で述べた)日本の労働者の勤勉ぶりの謎を解く鍵の一端があるのである。